

倭訓栞中編 古之部

和書門			
二一六五	一	八〇	八二
號	冊	函	冊

內閣文庫			和書
二一六五	一	八〇	八二
號	冊	函	冊

內閣文庫		
番號	和 21651	
冊數	82 (42)	
函號	263	10



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





倭訓梨中編卷之八

洞津 谷川士清纂

古の部

こあ

臥亞

譯も蛮国乃名也やまかきり治る名ありと云

合でい

碁石也白字のり紀伊の白字那智と稱せり

白ハ空式部日記

木のふれありれ流ふりふりとのいこもハ空やともを  
又山家集ハ伊勢れたる一とア流ふはといれ白かきり流る流る  
ア流るも難らひむひてまが流るハ空かきり流る也

又いり答志郡まら流の内ふ鳥流りりりりは流の由名塔まら  
又路鳥流もむし進し又豊後佐賀の国ふら流白流とて白  
流りりりり天然の碁石りり長門ふ筋流も然り全浙共制  
日本風土記ふ圍棋子非造成者乃本國沿海之傍而有生成石子儼

倭川集 中編卷之八 古

教部  
文庫





如做成精緻名曰天威子出于羗久山沿海之處白子出大隅山海傍皆大隅州所屬之地と云え太平廣記日本國王子來朝本國之東有集真嶋々上有凝霞臺々上有手譚池々上有玉碁子不由制度黑白分明と云えと云うこれ古昔皆自然の石子と用ゐるなり今名を以て白海蛤とて磨琢して造成せり羗久山西海の夜玖修集真嶋々伊豆の神集修と云し○今唐山舶来の碁子練成して用也雲林石譜自然の碁子此事と云う○南都正倉院石碁の碁子珊瑚瑠璃瑪瑙と用ゐるはくむの畫り○晝六とて常規一板は白のかりと云う一板は黒のかりと云う

こゝろにきき 小板敷と云う禁中殿上より職原抄侍醫參小板敷と云ふ禁秘抄小板敷西有棹間小庭時簡膳棚灯樓と云えと云う午抄集ふ二系院の時時小板敷と云ふ五文字と句の上ふをて旅のゆゑと

△ 狗あめくいとらんふゆめん三田川 活き魚岸のゆゑ

俗と云うたつと云うおれたと云うハ功字也

神代紀一産字と云う日本紀の字と云うこむと云う

めさう代略と云う也

公儀と云う親房のあふ義時泰時等随分存公儀と云ふ應仁紀小公方儀と云うのりつと云うは略也

建武年中行事一鈎丸と云ふは簾に付るの鈎也

内裡式清和實録等小勾當其事と云ふ當時ハ女

官及座頭小勾當の語は閑勾當と云ふ也○通雅小唐以来有勾

當之語韓文小勾當州字と云え今勾當專當と云ふ言はれ小

勾當實朝のハ幡宮と云ふ右大臣拜賀の時平勾當時盛藤勾當

頼隆と云ふ也○勾當内侍ハ長橋の弓と云ふ一の内侍也新田義

貞小勾當の文字と云うは初と云う

勾當の文字と云うは初と云う



こゝろん

公案ハ公事の案文也口案ハ張九齡ノ故事トシ

天寶遺事トスルニ

こゝろん

紺搔也職人守合ト云々今ト云々トシ紺藍

と搔たてし海ト云々也庭訓ハ村紺搔ト云々〇紺と海ト云々

きと云々ト云々西京乃通也カト云々ト云々ト云々

トシ長崎ト云々

こゝろんハ海カハ色ト云々他ノ事ト云々ト云々ト云々

こゝろんハ海カハ色ト云々他ノ事ト云々ト云々ト云々

年貢ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

ぬ布カト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

こゝろん

口綴ノ字異志云々ト云々

こゝろん

候人ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

こゝろん

洪水ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

こゝろん

野槌ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

ゆゑハ世ノカス人ト江帥ト云々ト云々ト云々ト云々

こゝろん

公用私用ノ字漢官儀ト云々ト云々ト云々

こゝろん

東鑑ハ後鬢ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

〇内々行奉ノ女中ノ髪乃飾ハ後鬢ト云々ト云々ト云々

こゝろん

薨御ハ親王女院掾大臣ト云々ト云々ト云々ト云々

納言ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

こゝろん

東吹事ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

つんえり水ノ縁ト云々ト云々ト云々ト云々

こゝろん

俗也ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

こゝろん

高名ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

こゝろん

子産石ノ事今後ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

中々類也文祿中奥州延沢山乃近境中修村ノ人民紀乃熊野

治ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

八十年ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々







こがも 人と作る代り、跌下のも也。自己よこけさるる俗也。

こがく 小角ともあり、ぎのた也。公卿れよ小角とて、あて盆とて、まをえり、盆也ともあり。

こがー 雑事通考より、江浙民家來、年及粳米、焦熟磨之、為粉名曰芳雪霜と云えり、是也。こがり。○豊大岡北野大茶湯の

時、僧りりて漲らる白湯よ、うりか、てある大岡其、淡薄乃一盃と感せ、ゆ今、祇園林の茶店、小用る、是より起る、や香煎と呼す。

こがー 太秦牛祭、文小つ、えるる、處名、千し、伊勢れ、南万、小薪ととり、小枯木の、ま、や。

こがくれ 木陰、か、や。小刀也、武備、よ、刀上、又、小刀と挿んて、雜用、後、こがり。

こがー 日本紀、小金、餓、刀とあり、四時祭式、小、銀、装、横、刀とあり、祝、細、や、金、刀とあり、也、東、山、府、の、流、金、化、銀、大、臣、以、上、用、之、と、る、大、流、れ、こ、が、刀、折、金、つ、ら、り、か、と、か、と、り、あ、ら、び、の、禁、制、也、と、る、る、り、さ、れ、古、法、の、器、金、と、い、は、多、く、減、金、也、と、い、は、金、化、の、法、も、知、一、歐、陽、文、忠、公、全、集、日、本、室、刀、乃、流、も、黃、白、間、雜、鍮、與、銅、と、作、ま、る、と、い、は、近、き、世、よ、り、ハ、公、卿、大、夫、ハ、ハ、り、と、り、れ、る、と、い、は、夫、分、上、乃、腰、刀、か、と、金、無、垢、と、用、と、い、は、か、ま、り、驕、奢、の、極、と、い、は、こ、が、れ、と、り、く、が、倭、名、折、金、屑、と、あり、又、銀、屑、り、こ、き、国、忌、の、よ、も、也。

こがー 倭名抄、小、金、屑、と、あり、又、銀、屑、り、こ、き、国、忌、の、よ、も、也。

こがー 神文雜例集、御、苦、長、と、い、は、神、宮、御、苦、の、倉、あ、り、御、饌、小、用、力、年、中、依、多、用、る、れ、土、苦、以、納、金、の、法、倉、あり、世、終、翁、お、招、ふ、法、食、物、ハ、御、苦、を、と、り、ま、わ、り、と、い、は、

こがー 倭名抄、小、金、屑、と、あり、又、銀、屑、り、こ、き、国、忌、の、よ、も、也。

こがー 神文雜例集、御、苦、長、と、い、は、神、宮、御、苦、の、倉、あ、り、御、饌、小、用、力、年、中、依、多、用、る、れ、土、苦、以、納、金、の、法、倉、あり、世、終、翁、お、招、ふ、法、食、物、ハ、御、苦、を、と、り、ま、わ、り、と、い、は、

こがー 倭名抄、小、金、屑、と、あり、又、銀、屑、り、こ、き、国、忌、の、よ、も、也。

こがー 倭名抄、小、金、屑、と、あり、又、銀、屑、り、こ、き、国、忌、の、よ、も、也。

こがー 倭名抄、小、金、屑、と、あり、又、銀、屑、り、こ、き、国、忌、の、よ、も、也。

こがー 倭名抄、小、金、屑、と、あり、又、銀、屑、り、こ、き、国、忌、の、よ、も、也。

こがー 倭名抄、小、金、屑、と、あり、又、銀、屑、り、こ、き、国、忌、の、よ、も、也。

こがー 倭名抄、小、金、屑、と、あり、又、銀、屑、り、こ、き、国、忌、の、よ、も、也。

こがー 倭名抄、小、金、屑、と、あり、又、銀、屑、り、こ、き、国、忌、の、よ、も、也。



ふるふるの法、音の字新書にも○茶盤より上の茶形の似たり也、六方麗乃産也とりの

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

こきり

ふるふるの法、音の字新書にも○茶盤より上の茶形の似たり也、六方麗乃産也とりの

御給くちり院文の法給かくりの

鼓引とちり中山録小提琴、即用三弦著引、引子

上やふるふるも、是也又笠篔の取也とりの一説ふもと鼓、蛇

と鈴、蛇とりの中山録、国中蛇九月出傷人立、斃とるを

職人、余合ふり、このこきり、このこきり、筑子

とりの小截、解の取、やかと及こ也、この棒乃如

弘徽殿也、物沼ふるえとりの

法、却字善相公意見、ふるふるあり○こけん、活券也

万葉集、小神ふるこきり、この名、かき入つ也

ふるふる、かきこられて、一箇、稲か、このこきり

くふ、考て、この後、撰、ふるふる、たもと、このふるふる、たもと

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

ま、このふるふる、

こきまぜて 柳極とこきまぜて、かくりの六、撥、皮、の、取、也

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて 柳極とこきまぜて、かくりの六、撥、皮、の、取、也

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて

こきまぜて



とあぐをかきとる

こぐれ 木陰とよとりの周きと也

こぐり 小串の矢射術とりの串的也

こぐそ 木屑の矢射下し類聚雜要に木屎布る也穀耕録

に稍當とりの船のこぐそハ船茹也船船とりの同 〇倭名抄

に蠶沙とりの

こぐハ 日本紀のやふんをあり私記ふ木鋏也とりの今ハ

鑄也

〇こぐみ 一説ふ白人とあつひとみ古久美の美と麗

改めて新羅人高勾麗の美とりの犯巴母罪犯己子罪等のみ我

朝ハハツえぬとあつひとあり住み新羅人ハ黎人びとありと

冠とりのとりの

こぐい 刻印の象也とりの俗とつとりの無究録の注

に鑿記枕言刻標也とるえとり

こくつ 高勾麗の音也 〇衣とつと色とつハ小栗也

こくり 国司ハ孝徳天皇のけり始る国道の事とるふ

りとる年治りり其国政と執りり 〇三國司ハ土佐の一條

伊勢乃ハ畠孫乃姉小路とりのハ数代と登て其国ハ裔孫の

ゆり也

こぐぶ 氏姓村里とりの国分とあり昔法ハ国分寺国分

尼寺と建て東太寺と惣国分寺と天平中の中也又ハ羽院乃

天永年中ハ六十餘州ハ天永ちと定められとりの 〇信濃小

縣郡乃ハちと今ハ旧堂とりの二寺毎正月八日とりの十日まで

寂勝經轉法とりの也

こぐガ 国衙とありハ司の政と行ふ也今ハ尾張中治郡ハ

国衙在りり司館乃趾と国衙島とりの朝野群我ハ依庄園

訖送国衙牒とるえとり

こくガク 国学ハ倭学也神学ハりり欲学ハりり虎関の国学



者藝術也といふハ有職者流と指してさや道德不関らぬ  
如くおもつるハウラウシ

ぐくもん 梟也獄門不敷るもの故ふ其處とりてくも也

こくそつ 中納言友永季仲太宰帥とある色は黒いよき黒師  
と呼び侍り髭黒の大將なり

こくまろ 佛の日光と後光といふより杓の影に映るるともいふ  
こくたろ 俗ふ人と罵初るもの言句絶の義ありていふ

こくまろ 俗ふ人と罵初るもの言句絶の義ありていふ  
道断なりと天台大師乃妙法と讚美せしめ也

こくまろ 黒餅の衣幕の紋といふ中世の武士は祭に黒  
餅とりて家紋とせし也といふ

こくまろ 王禹偁表し早年多病眼有黒花と見えたり俗ふ  
まぢふ花といふ

こくまろ 国姓爺といふり季明の功臣鄭芝龍日本平戸嶋

一住して鄭成功と生り芝龍清の大祖に降る成功永曆帝と  
立て明の恢復と謀るよと帝朱氏と賜りししるも時人の採  
りり康熙五年に大宛に卒す其子錦舎其子奏舎といふり康熙廿  
五年に傳とありて北京に幽せし後貞享九年に由り隠元  
禪師の持来りし鄭成功の書蹟もまて観つし

こくのねび 拾遺集に西玉帯といふ也

△こけ 碁筭也後撰集抄紙にこけけと見えたり碁盤

是也○南都正倉院所藏の碁筭ハ碁盤の足ハ抽匣といふ  
碁の形ハ石と入り足も碁盤といふて施子形ありて○碁子

一目二目といふ文選注ハ枰棋局線道也罫線之間方目也といふ  
こけふら也酉陽雜俎一目と一段とあり又路ともいふ

こけ 後家乃字朝野群載ハ権中納言某朝臣後家といふ  
儀式帳安東郡專當沙汰といふも今も寡婦と稱せり後  
室といふ



こげか 焦とよみりこつと自他の異也○焦飯とこげや  
ソリ

こけい 御禊と音より也源氏より西賀茂は新院卜定  
ありて後東門に臨み居りてみまきあるとりの大嘗会やも  
ゆりてゆりて行幸ありて行り其儀式れひるしけれは後  
世略せしとて晝御座ふ出御ありて行りて皇帝三后  
東宮齋主やお六禊とひたの人よ後とひたり

こけん 固関とちり赤山赤海の間とかさひりたり御  
即位ありてあり事也○御監とて西宮記ふ右馬寮之御監  
事上卿奉勅召御寮官人となりて御厩馬監騎射之義也といり  
こけくげ 麴の如くふりて頭のも也といり  
こげごが 漏猿の衣や群猿の中より○ござれて指りふ  
ありてはやく

こけかハ 若繩の城ハ播州より赤松築て義と奉しり也

こけいらん 虎溪蘭の家美濃の虎溪より出る水也蒙

こけくづき 屋より林葺乃義也

こけくろ 俗流也こけくろや新帖ふ

△ごご 長崎にて小兒のやとひ仙臺とて人の妻とよ

こくち 心路の義也下し倍ふ心りちとよ心みちの持るや  
○おちりてといふ相承のよ一孝孝の記也

こくろ 万葉集疑字とありりて寒疑の義也靈異記よ  
者鯉寒疑とて白今もなごり鯉とて射あといふり

こくめ 世人小兒と怖るふかしく六醜女の訛也と倭名抄  
より著せ集ふ鬼くめとるえり今倍あめといふは將  
訛ぬ一赤目と心得より 睚と及るふはかれるぬし○碎  
米とよつ○笑靨花といふを碎米と似たり也○俗は屈め



とこめつともつ

とこぶ 氏姓の牛糞ともつ又くそともつ 太平記にもつ

氏也

とこや 懲辱の安ぬし信也

ところけ 土器のおきとつ小かりけの急也

けとつ

とつとつ 万葉集にもつ

も云く曾許波久もと連もつ 此所其所とつ言也 仁徳紀の

よそとつおのひてとつとつこれのひてとつ

とつえか 凍又返ともつ

とつおほ 密聚のともつ

とつーき 萬葉集に疑敷山ともつ又興敷ともつ 興登魂の例也

石根ともつ

とつーきともつ

とつらむ 神代紀に試ともつ 心観の安ともつ

とつらむ也 葦ともつ

とつらえか 心得の安也

とつらぎハ 心際の安也

とつらじ 文選に喚呼ともつ

とつらづき 遊仙窟に關情ともつ

とつらみえ 後拾遺集に心ゆ也

とつらあて 心あてがいのとつ

とつらぐ 万葉集に情具ともつ

とつらーも 爰ともつ

とつらぎも 浮世にも日本紀に心府ともつ

とつらのひ 心也

とつらまセ 心を寄す也

とつらぶと 延喜式に凝案ともつ



鯢鈍のちふ伏免と云ふことぬ一職人字合ふまゝなりていふもつら  
ての太の音訛ぬ一今俗と云うてんとしん也西土は瓊脂と云ひ  
まゝと云ふ花菜と云ふり字合の詞もあつてあやうも入ていひしん  
心太と云ふより注釈と云ふぬ一庭訓往來小西山心太といふ六製  
一也と云ふと云ふ也

こころより 神代紀小快と云ふり情佳の事也

こころゆき 是以てよりり所以と云ふ事也是故とも義相

こころまは 是故語首一のよりり○是用も是以て同

こころのど 心の師也師心の字莊子より新撰六帖

こころあはれ 心の師と云ふりぬもれりといひ一乃と云ふ事

こころぬき 是ハ涅槃經の願作心師不師於心が事也

こころゆき 廣爾雅粉米雪と云ふ事

こころまは 徒然草と云ふ或ハ心体と云ふ

こころげうい 心の使也又心と云ふ事と云ふ事○花玉と云ふ

乃使と云ふの事と云ふ

こころまはれ 心惑乃私記ふ失意と云ふ

こころまはれ 心不離の事と云ふ事と云ふ事

こころまはれ 万葉集ふ心競と云ふ事

こころたけ 心の高上と云ふ事也後拾遺集

こころのちひ 深き所のちひと云ふ事也

こころのちひ 心よきの事と云ふ事也

こころのちひ 深き所のちひと云ふ事也

こころのちひ 徒然草と云ふ心の色也

こころのちひ 万葉集と云ふ心の緒也

こころのちひ 心の苛つと云ふ事也

こころのちひ 六道講と云ふ適剃頂不剃心染衣不染心可耻と

こころのちひ 俗語と云ふ事と云ふ事



こころかまへ 活民よる心は度のも也こころ

こころこころ 活民よる心は度のも也こころ

こころゆくり 心の行兼ぬし夫木集

こころぬれ心ゆし 活民よる心は度のも也こころ

こころおこし 伊勢物語よる心は度のも也こころ

こころゆへい 活民よる心は度のも也こころ

こころおこり 心劣也徒然集よる

こころのこほ 法苑珠林よる心馬情猿こころ

こころのこほ 活民よる心は度のも也こころ

こころのこほ 陶淵明よる中のもを放ちたるを中よる

こころのこほ 心のやまもよる

こころのこほ 心は連也此のこほ

こころのこほ 石田よる乱れ倭寇の口快と公家よる

こころのこほ 古今集の序人の心と種とて万の心

こころのこほ 幽齋翁の圓智院公國卿より古今集の序人の心と種とて万の心

こころのこほ 菅原万葉集よる心は度のも也こころ

こころのこほ 伊勢物語の心は度のも也こころ

こころのこほ 伊勢物語の心は度のも也こころ

こころのこほ 伊勢物語の心は度のも也こころ

こころのこほ 伊勢物語の心は度のも也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ

こころのこほ 心のち也こころ







ナリつれさそ

詩鶴鳴九臯トソのさ也基俊

九のさつよあちりりたつるさとおりのあまハたききこゆき  
のちさぶとソのあちりりわ求む他也ト

新撰集ふつるさ

こころのわみ

心の鏡也花ひ集よ毫とせり

こころのかくさ

心乃慰ありとせり

こころのいづこ

千載集おろよん心は泉也

あろ乃みか

ふの湊也花ひ集よ硯とせり

あろのあし

ふ乃嵐也とげきとこ

こころのわとむ

新撰字鏡よ松又仲とせり

こころのあやゆ

九節の菖蒲根ハ仙衣の貴ぶ物也

△ごさ

松葉紙よ法世といふたきけり多きとせりと貴人の

あつせりたけりあつる今ハ法世の結とわたり○社ごさ臥  
席也○法世船ハ樓船也漢ヨ大座船をとるえり○信よご

これとソハゆたあま也

ごさい 六月十六七日と伊勢の清祭礼とすよと六月土用半

ごさけ 日本紀倭名抄よ醴とより濃酒の類也今俗ハ

ごさけ 日本紀倭名抄よ醴とより濃酒の類也今俗ハ

ごさけ 小賢きの略也點智といふ俗よつるがーこれといふ

ごさけ 山谷集よ小點大癡螳捕蟬とんえり

ごさけ 混雜の音かゝるがーとせり

ごさけ 新撰字鏡よ移とより又接とより

ごさい 御齋會とより太極殿とて最勝王經と講

ごさい 也桓武天皇とより始

ごさい 平家物語よ多き句也こそらゆかれのあま

ごさい 一とあまも也

ごさい 日本紀よ醴泉とより享保十年正月



太上法皇の命ようて美濃国多藝郡多度山養老の醴泉と汲て奉り給ひ御使ハ源茂敬也と名とく元正天皇乃時ふ起りて行幸ありし所其事續日本紀云々

こさくねど

伊賀風土記伊賀郡一櫻本山櫻本里

り今櫻本寺ハ森本村のり、永閑院ハ天武天皇この所乃桜本寺に休ませたまぬ御りしも慕風吹きて白糸威の御きせをがし桜花の散かりて偏ハ桜挿頭の如し其後小桜威始まより昔はと伊賀威といふととこれと天武乃伊賀と歴て伊賀人踰たす六月おれはるや一全体為赤くして其の金物也と云

△こい 元子とあり攪の教也俗ハ腰かけといハ四角い

聊長とありて四脚也と云

こトコ

倭名抄小瑞とあり文選註ハ以金壁飾椽端

也と云るあり小尻の象也○カヨハハ鏢と云

こーべ

播磨国揖東郡一越部在り越部禪尼ハ俊成

の女其遺趾越部在一保村あり禪尼并阿仏の墓亦現存す禪尼ハ八條院の三糸也阿佛ハ皇嘉門院の四糸也為家の後妻たアとて為家と云るめと地をたて為相譲與へし其文は乃賞する領地ありとあり今其庄十四村と云

こトコ

女ハ掘の古語ありや古事記ハ高賢木と根にこトコと云るあり○今俗にわらと云ふも高賢を云り

こトコ

居士衣ハ野服の遺制也と云

こトコ

章昭論ハ故實ハ故事之是者と云る由史記小固

實ハ俗

こトコ

延喜式ハ輦籠と云り輿とてかぶるといふ

下儀式帳ハ大輿籠と云るあり

こトコ

婦人の帯下といふ







抄て忌とつろ○故障ハ北山抄ふる也

こーやく口釋の音かりとつろ小師役の急詰ぬし今點

こどきみ智とつろ五節ノ師小師とつろ類聚雜要ふるえろ

こーづみ禁秘抄小殿上六間有小部主上覧殿上所也とる

こーづみ腰丈の寄受小射ノ大流孔ふるえろ

こーづみ封のめい書也とつろ封のめい書とハニツリてと

こーりて腰當の寄矢と佩とつろ

こーかり腰推乃使使唆のこととつろ

こーつぎ腰次とつろ布の袴也上結りの付用下袴近代ハ

こーつぎ平箱也下結の付指申の下用とつろ

こーづみ景行紀ノ技字とつろ

こーづみ和名抄ノ髻とつろ腰骨也とほと

こーづみ大双紙ふる由腰纏の寄女の服とつろ女房飾抄

四月朔日より初めてつろまゝとふるえ内々行幸小社地社

アハとふるえ同俗給也とつろ○信濃高井郡小腰峯村り

こぢとつろ倭名抄小女公と訓ヤリ大学衍義補小自唐以來

称為小姑とふるえろ尔雅小夫之姊為女公夫之女弟為女妹とる

こぢとつろ木采垣の寄野とつろ大垣とつろ

つるえろり○神宮の朝廷遥拜也又袴のこととる

列と整とつろり列所とつろ

こーのこまことけ小婚取とる

縫合せると入てとる縫合せると入てとる

こーのこ腰物の袋刀代り腰刀のこととる

こーのみち和名抄小紙帯とつろれみちのら紙中とつろ

みち乃あつ紙後とつろみち乃あつ紙後とつろ

こーのこ陶淵明全書小我豈能為五斗米折腰向鄉里小

兒とふるえ老学庵筆記小以小人為小兒耳とる



倭名抄ふ金漆樹と云ふり本草ふ金州者為佳  
世称金漆と云ふるなり

新撰字鏡ふ帑と云ふり腰袋の帑也  
平治の我ふ大旗腰小旗と云ふるなり近代の腰差

指物かよのねやと云ふり  
五常樂と云ふり倭名抄ふ五聖樂と云ふり

文徳実録ふ帝聞光定在山資用絶之別賜  
乞食袋濟山中之急と云ふるなり耳底記ふ字同乞食袋の乞と

一何かも入てさく手後と云ふるなり也と云ふるなり○倭名抄ふ  
乞食調曲なりを採果かき入るなり作係抄ふ大食調と云ふるなり

食調と枝調子と云ふり唐志ふ歇指調なりと云ふるなり也  
と云ふるなり

法書所と云ふり法書所預かきと云ふるなり朝野群  
我小同所覆勘同所閑闔と云ふ也倭名抄ふ蘭林房ありと  
云ふり平治物語ふ竹俣所の事と云ふるなり

こーかけや

日本武志の腰掛石は近江醒井の水の中より

神功皇后の腰掛石は筑前穂浪郡の大野より方四尺許と云ふ  
大塔之の腰け石吉野十津川戸野兵衛宅跡の四也

こーかけまつ  
腰掛松也鎌倉村戸村より頼朝のいこ  
ひーあし侍入りり義経の腰け松也と侍入り枝四方ふ  
云ふるなり

こーきのまつ  
高僧傳ふ五色水以都梁香為青色水野金  
香為赤色水五隆香為白色水附子香為黄色水安息香為黑色  
水以灌佛頂と云ふ也

こーむかからん  
勢向より木字と云ふるなり也と云ふるなり  
統と云ふるなり

こーゆきまふ  
志名伊勢物語小言集と云ふるなり

こーりやまつと云ふるなり  
紙路ハ三越の地と云ふるなり或ハ塞と云ふるなり

かゝ極陰の対北ハ老陰の地と云ふるなり  
かゝハいせや○こーぢの



浦紙後也

△ひす

茶碗をひすは極素とあり讃岐の陶材かむか石あり色と焼ひひすは画焼青也ひすは美濃赤坂山もろくひすは蛮名也もろくは焼物ゆゑ昂と倒淡せりもひす

ひす

倭名抄小梢とあり木末の葉也○こまのまこずゑの秋杪春杪秋の漢名よりひす河也

こまゆ

小研乃名倭名抄は碾とありゆとありに通せり或ハ錯とあり又標又劉とあり

こまむ

碁のこまは河也尖字とあり

こまろ

倭名抄は錯子と訓せり鑢の別名又摩也と注せり新撰字鏡は借木とあり磨木之具也と注せり借ハ錯の誤字もや

こまら

漢語抄は杵とあり唐韻は鋏の属とあり木鋏の

○こせ

瞽女の轉訛せりや或説は御前也常盤御前静浄前の稱に比せり瞽者とてたひといひ瞽女と清和といハ美号とて憐む也とあり○尼侍茶とあまぜといは盛衰記にえんり

こせら

五節の名は左傳にえんり大嘗会に用るるこせは顕宗紀に本朝月令の況心得るるその吉野のこせといは古事雄略記に揺るるものにて其字ハかみれ

こせき

名を節略して短弁とせり○神代も五節舞あり事大御元也といふも○西宮記に舞有五節別一廻合五廻舞とあり○建武年中行事にまひのむのむる五といひ神とに

こせつ

長明が海道記に小関とあり越て大津のこせとありてりといふ四宮の辻よりたし折て行くと小関とあり五節供也元日三重五七夕重陽といハ八朔に



のこのり委一朔望と賀もろの西土も回一廿八日大権現岡  
傍の清居城の対清家臣が於ち宗多かりし故廿八日の朝乃場へ  
糸溜一其日清機嫌と伺一う風俗の礼とかりしとや

こせんト 鄂曲一白きうもやうこせんト紙とるを  
小富音の紙也とつ一説濃凍紙也とつ

こせぬらも 乃翁集一有巨勢濃香毛一と有興宿鴨と  
ふんてこせもそと一言の持せり也

こせちころろ 雲岡抄小五節野八常寧殿一りりとも  
△こぞ 去年とり昨日ときとつ一やめ一又去歳の持音次

とつ一〇こまやと略一とつ一母之集一とるをり一〇こまま  
とつ一り

おゆのちやちぬ一種手紙て卯月さ月一か一とる  
こぞ 清和の音とむや一か一唱一とるや今とつ一とる

るく一其音とつ一一條衣れ餘胤土佐小住一り一長宗我部

元親の攻落れ一付

一條で作りま一紙衣破とらまは御所めきもせ

こぞめ 濃漆の衣也多一紅のこぞめとら一〇菘とこぞめ  
草とつ一花とら一とら

こそろ 宇治松と蛇こそろとら一りてとら暗りのま也  
俗一とらとら一とら也一助けの伺今静宗のま一とら

こそぐら 人とこそぐら又こそぐら足か一とら小探乃  
ぬぬ一俗一操字とら一り字とら梢也とるをり止観一

權とら新撰字鏡一八撃權とら一  
こそげら 俗一也小尖のぬぬ一刮字とら一刮馬汗を

ゆま一り一説一古事記一岐佐宜一とらえとら訛言也  
こぞめづき 紅條月の衣八月とつ

〇こぞみ 神代紀小木種とら一り〇口語一ハ子種の衣也



こづらち 木立也立る木をこづらち中臣統も盤根樹  
まつくんえりう○小刀とよつり平家物語小行家片も大野太  
刀と持持はるは合信傳りの小太刀と持とるくもつり○木立林ハ加賀  
乃地名こ

こたよ 海氏と名由細流孟津と鳥のた也とつり柳糸紙  
もこけこご小ころん由木虱とよつり木のだふ也といつり況あ地  
文をよわかつりともろえと木よつけりすめごけとよつりよの今い  
ふものうく納タ似とよハ乞あつぎきや

こたろ 五嶋とちり海東諸記小薩摩州ノ属と日本往中  
国者待風之地とるへりすもろふ名ろり○内タよ清稻御倉ら  
て稻と納るれ倉也俗よ清檝殿といハ訛也

こたろ 倭名抄ノ徼道とちり唐韻小小道也と注セる据り  
こたろ 答タ寫り以後段ハ唐山と尋後といハ古者後  
更珍以尽主情といハ乞後段とちり

あたつ 火燧心得と火榻とて唐人ハこたあといふと  
西去地ノ磚ヒキカ一床ユホ椅イスとをきこつり也日知録小北人以土為牀  
而空其下以發火謂之土坑舊唐書高麗傳冬月皆作長坑下然  
煨火以取煖此即今之土炕なりとる也似つり也といつり○禁  
中タ火爐と用く事タ分タとるも炭火櫃タ生てとて覆ひと  
かけて用わさるるれとるといつり

こたくみ 木匠の也也松匠タむかへといつり○朝野群載小  
木タ寮タこたろタ乃つかことあり

こたくみ 古炎榜ハ下野タなり  
こたくみ 日本紀小太子とより百濟タ也  
こたくみ 浮タ也タ白タ也タ秋タといつり古帖タ小タ也  
よとるともあり或ハこのりハ下と略少とよといつり又



うづひひらひらさるばるのやうに大層なや  
ぶたきせん 法託宣也律のかりてはるまのやうに○俗

自今以後若有百姓輒稱託宣者不論男女隨事科決すべからず

○世に三社託宣といふ神樂岡記愚蒙記ホに云く雖食鉄丸  
不受心穢人物といふ梵網經に寧吞熱鉄丸不以破戒之口食

信心擅越百味飲食しうりやう六根清浄の法華經しうりやう出く  
と一般やて心得しうりやう△こぢり 火筋の音將也ひびりや

こぢり 俗に小膳あるをといふ臺中の音かこぢり  
こぢり 延赤式小税といふ五十鈴宮に小税百石束大

税二百八十束小税一千二百廿束といふ  
こぢり 御持僧とかけり鳥羽院の比り始り或ハ護持  
僧ともえ也

こぢり 古事記のやうにまを近けや也といつたが  
こぢり 木のこぢりな枝とつらうあるところをこぢり  
こぢり 土佐日記にス骨ほねき也といつた浮きも  
こぢり 説小書といふ 参遠のやうに信託也小書飯といふ伊勢

こぢり 牛頭天王のこぢり也瞿摩掲唎提婆囉惹也瞿摩  
牛掲唎耶ハ頭提婆天囉惹ハ王の梵語牛とことよむハ吳音の轉

也つも吳音の牛頭天王鳩摩羅天王十種反身の名也如意  
藏王陀羅尼經におく素盞鳴尊と配なま祭まつりの備後風

土記お据る成なり○牛頭香しうりやうといふ同なま兼名苑なまといふ  
牛頭梅檀しうりやうや華嚴經小摩羅邪山出梅檀香しうりやう早頭名義集

と次山峯狀如牛頭於此峯上生梅檀しうりやう

と次山峯狀如牛頭於此峯上生梅檀しうりやう

と次山峯狀如牛頭於此峯上生梅檀しうりやう

と次山峯狀如牛頭於此峯上生梅檀しうりやう

と次山峯狀如牛頭於此峯上生梅檀しうりやう



こつろ 万葉集「つるろり」木屑の糝ろり也○こつびそ

こつむ 万葉集「つるろり」木屑の糝ろり也○こつびそ

こつむ 林とあり木端の骨こけり同

こつげ 万葉集「つるろり」後撰集の「つるろり」○

こつげのめ 二議一統「つるろり」

こつこの 倭名抄「鯉」あり角中骨也と注せり

こつぐ 俗人こつぐ「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭

こつぐ 万葉集「つるろり」杵築の安伊勢小杵築祭



作言

清不豫の時僧の二休奏して彦仁親王と儲君小定めなる

一休の字は 常盤木や木寺の梢つゝまてよ世とつく竹の園ハ休見

二休年譜ふるんらん 拾芥抄清凉殿云中殿又云御殿ふるんらんたれ

宸居也 俗よま人の命と御諛とつゝ袋草紙ふるんらん諛ハ

二合の倭字ハ海篇ふ知ぬとつゝ人の音とてとつゝ海

印ハ勅言と口づつとつゝとんえとつゝハのつゝらと同一

とて乃特化ちとつゝや 源印ふるんらん李部王記よ其年錢二万とつゝかけ

とてのせに 小朝拜也歳首殿上の侍臣のく拜賀する

お乃後也○盛衰記安德帝誕生のまよふとつゝ後知れ

舟ゆとえのまけとつゝいよまてく例ある事とつゝやとつゝ

とつゝとあ 日本紀ふるんらん等乃繁葉一兒等とよあり唯人

とつゝとあ 五徳あるとつゝや何とつゝとつゝひたつとつゝ

とつゝとあ 鉄三脚子とつゝとつゝとつゝとつゝとつゝ

とつゝとあ 法梵ハ天子ハ辰よとつゝとつゝ火ありまよ也北山の靈

とつゝとあ 巖寺のまよま子とつゝとつゝ王城四方置靈巖寺と拾芥抄ふるん

とつゝとあ 由一名妙見寺○鯨呂ふるんらんとつゝとつゝとつゝとつゝ

とつゝとあ けつとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝ

新編

三



いづる○海人藤芥小鳥ハ鶉雲雀鳴は卯ハ供法不効ト云  
えいづる或は押字ト云々ト云ハ也ト云々ト云々ト云々○  
堀川院の清字殿上小鳥合中右記ト云々

今歳ト云々此年の名也されと書ト是歳ト云々  
今昔ト云々通る詞也ト云々今茲ト云々ト云々  
神代紀ト興言ト云々又言又祐ト云々又發喜

言ト云々古事紀ト言擧ト云々ト云々  
辞竟辞定ト云々ト云々  
古事紀ト言向ト云々神代紀ト平字ト訓セリ

万葉集ト云々やぬ神ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
めり逆ラハぬト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
万葉集ト云々言傳ト云々ト云々後漢書ト傳言ト云々ト云々

事ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
事ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
事ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

也人ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
俗ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
異浦の名也○ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

侍女也頼政の才丹後守行乃女ト云々ト云々ト云々ト云々  
志ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
○琴浦ハ橋は民庫郡尼崎ト西云々ト云々ト云々ト云々ト云々

浦舟ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
ありト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

神功紀ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
えト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々  
ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々



ことつま

琴丸也西土小義甲と云ふなり

ことひき

延元式小彈琴と云ふなり○琴引糸大和也琴引彈弦ハ丹後也歩行とれハ自然一琴丸音なり

○山城の旧野と石田とのあそひのりつる琴深山ハ土俗小平重衡其妻と云ふ今もて琴とて別と惜ひてつら出や飯石郡も琴引山なり風土記と云ふ也

ことだけ

本の上端也伊勢物産小むねおれハこたつとしてや

又由ま名小言と云ふは祝言のこたや

ことより

顯昭の流ふ世の人所習ふことよりこつと詞のこは

とつと也古今事のいでんことのことと云ふなり

ことぎほ

伊勢物産小むねおれハ異様と云ふ

ことあり

異と云ふなり殊小ありやハあまも也神代紀ハ死と

よあも同

ことろき

鹿嶋のろきことと云ふハ鹿島と占トの一流

ありしよりけりぬへ

ことひや

伊勢物産小むねおれハ異人と云ふ

ことのと

倭名抄小弦と云ふなり

ことり

異腹と云ふ也捨棄集ハ亂れ琴丸と云ふに子と云ふ

と云ふ

羊皮つてる所のこたや秘をみつことと云ふハ子と云ふに

琴の腹の字琴ヲ箋圖式ハ云ふなり

ことおひ

万葉集ハ歌思辞思ヤハ云ふなり

ことぐい

古今集ハ誰と云ふハ分てけり事と云ふハ世

万小色珠ハ丹と云ふなり貫ハ集ハも色と云ふハつと世と云ふ

と云ふなり俗小面と云ふハつと云ふハ解と云ふハ非也と云ふ

ことさび

源氏ハ万色珠更と云ふなり

ことま

松糸御小ことと云ふハれり神つたのトハ文徳実

録小任事神ヤ記ヤリ式ハこのまらと云ふなりまら佐野



郡よりまは鴨長明うさわれ中山れはふらる事のみれ社とあり  
 今もらん初はきこてのすけはあけりちるまればこれ初集  
 ちとのきさし 萬葉集よる由本退ての美みかられこせといふ  
 ちとのやうい ちよま和とあまこと陸師のきぬへ一殊少といふ  
 同し不慮之外といふぬ一初古今集ふ  
 山里ハ世のうれううに位けひぬここのやうあうさみれりしよ  
 こころい ちよま一きぬへ一夫本集ふ  
 まるゝ初乃かけり入るくわうび多ありこれこころい一こま  
 ここののぞく 小殿腹の家也或ハ殿原といひ○春盤一用うこまあ  
 ども初せり初の多さといふ初とまら也たつらうともいふつとも佳  
 名ありといひ祝賀のおとせり韶陽魚也といふ  
 ここのりり 源氏抄系紙をいふ由言吃の多也新撰字鏡小  
 吃又誼又噤吃といふ今ぞりいふ  
 ここのをかき 初の辞法也小序といふ如

こと初こや 古事記よこころ初こそ若といひその日初紀ふこ  
 初こそたふといふ初催馬集よこころ初こそ初こといひこめこええう  
 ここのいひ 万葉古今源氏ふええう初こ出た初也ここ  
 ども同し拾遺集をいひつきをいひもここていひここええう  
 万葉集よこころ初こそ初こいひも言出也といふ也  
 ここのめき 口笛といひ初の吹乃初笛の譜と初と唱うも  
 也といふ大和初初のすよここええう  
 ここのあやまり 源氏よこま初錯の家古今よ  
 ちちきれくつ初路の魚といひここ初こ初こ初こ初こ初こ初こ  
 ここのちれう 本も粗略の家初初初初初初初初初初初初初初初初  
 初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初  
 ここのたひそ 堀川初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初  
 ここのつら一説初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初  
 ここのそよ初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初



こととしつゝ 銘林良材集ふゆることいひ出さるるもる記也也  
るんらんりとも殊のあや

ことあやらつゝつかさ 日本紀小判事とありり事断る官ガサ  
のあ也

ことつらつ乃みや 琴造のえとありり讃州三木郡の邑名也  
盛衰記とあり

△ことあぎ 小水葱也書也アキありり  
これまゆ 馴熟のまことあけりも同○仲正アキありり

ことあが 叙日本紀小練金と訓せり延喜式に砂金と對し  
つゝ熟金のあ也

ことあいあよ 室町家の付奉行に終せり將軍れとありり  
つゝまきり法内書とありり也内これ法とありり也

○ことあー 倭名抄に胡荽とありり音れ特ありり今とえ

ごりごり 蜜語ありり

ごふあが 日本紀小玉后とありり太子とこれせりとありり私  
記に並に百端の倍也とありり

ごうやー 拾遺集小る由弱弱也倭名抄も知りり音れ特  
せり也○山らんやと稱するハ天南星也とありり本もも鬼弱

ごよまきい 新撰字鏡小呉菜菓とありり  
ごんぐら 文藝通考に五保人とええありり日本紀小凡皆

△ごり 五家相保とありり  
ごり 枳やれりハ木條のあ也御所枳と上田と大和

○ごのま 乃法所の邑とありり出す  
ごのめ 乃原集に木間又木際とありり

ごのゆ 樹のあ字彙小束音次木コ也とありり  
祝詞に盤根木根とありり



このし 木葉也或ハ杵と云り○雀小似て法思ふ名と  
このし 移せり

このま 近衛の音形也影古惟行幸一みつかのこのまとよ  
も御綱の家成一○真名伊勢お初小近衛司と親衛司と云り

このこ 俗小孫と云り子々子の字爾雅よる也といふ  
このみち 木道と云り材木と云り見分る事といふ也

このあろ 日本紀小利と云り子代の義利息といふ也  
このろと 伊豆守源仲綱と名と云り一麻毛と蔭小と云り

このつら 也といふ  
このつら 海嵐の色を云ふや袍といふ  
このろろ くのそがらといふこの海嵐か一いふと張といふ

このしほ 神名式山城葛野郡木嶋坐天照御魂神社古来四万  
学者最所崇信也と遊仙窟の跋ふる云り太秦村といふ

このゆり 神代紀の木株と云り延喜式小樹立といふも

同 枝杓也大殿祭ハ木根のまといふ往昔の諺ハ岩根木立も  
言同昔と叫一さゆなり三韓の事と天地割判之草木言

語之時と書るの如一○同紀小樹下と云り一河及口河といふ也

このろく 神代紀小以還と云りたよ以來といふ  
このろく けとつらり寝ぬといふ也

このろく 木葉石の稱西室も同一豊後肥前といふ柴石と  
いふ後よりいひそれら中よむや大社の産ハ栢葉也當社の神

紋ありともて神紋石といふ美濃の清嶽月吉信徳の栢かこの産  
ハ石葉と云りて葉紋金色也信濃小諸城中ハ鶯梅れ文らる

あり方二同と云りれ大石也能也乃土人井と掘り形回ハ卵を  
あふて黒色乃石を二十箇をあり知も缺らるるハ木葉の紋あり

といふ事後の園子といふも破さるるハ木葉れ紋あり



空の中よいて破る也或ハ魚乃形もつるを岐國の木は石よま

魚乃形の紋なり  
こ乃まじり 木實をね安流くいつくや呉竹等

あじし以ち山乃奥ねおろそきけぶあ乃女やうけえて  
こ乃まじり 猿のさかき沢りやう宗祇乃説也木實

天狗をくもつり拾玉集よ

葉栗れ色づく秋の山風よ木実と成ぬ木葉枯ゆ  
事又類聚ハ秋猿守栗林とるえり

こ乃まじり 多識編ハ葉子金也とつり

こ乃まじり 木下園也無つらき河のこの中移ハ  
せこのも也とつり

このまじりや 木實をね也泊瀬の奥あり泊瀬の船を木  
ねまのよまゆいとつる人の川りけり

このまじり 菅束万葉よる由條ふあり

このまじり つらつら肉ちいさきと木實を復とつり

このまじり 浦より人まとゆ鹿飛岩と切てあとおの木の後より人まと  
白小地震雷電よあを逆またあり船はも流き瀕死の

この三十余軍也よて今よあり湖水風をげしと里人木の候  
風とつり

このまじり 儀式帳ハ木本祭とつり又櫟木本祭と  
るえり

このまじり 諺語の譬小つり籠中鳥也濮陽傳り詩  
よ為聖賢中苦空懐樹上嬉とるえり

このまじり 催馬楽也此殿ハ秘曲乃名也

このまじり 徒然草よる木道の工也匠人よ  
△こハ 織物ハ名く阿蘭陀よりあり

このまじり 十月と小春といつる歳時記よるえり○腹乃絞



痛とるるとつひつひの音やもつろつ小張の義あり○強とるると  
 △ハ不和柔貞とつろつ  
 こむむ 拒字扞字がとつろつ強きをこむむ  
 こむむ 袋中子、倭綱朝臣の故平次奉て下膳のきつろつで  
 つろつものをこむむとつろつをこむむ樸小似とつろつや  
 こむむとつろつ野の窟さむけとはつろつを里とつろつとつろつ  
 ○こむむとつろつ城守、治郡也或ふ許彼多神社三座とつろつ二座ハ木  
 幡村つろつ一座ハ五箇庄大和田村小あり柳明神とつろつ  
 山科強田山とつろつ○今小見の服小つろつ同義あり  
 こむむ 媚の義也とつろつ及ふ也又小馳の義や俗義也  
 こむむ 俗小物とつろつとつろつ剛破の音もつろつや○崩  
 と俗よこむむとつろつとつろつ  
 こむむ 日本紀ニ裔字孫字跡字がとつろつ訓也つろつとつろつ  
 こむむ 牙籤の義とつろつ小狭の義也鞞ハ倭の造るも也つろつ

けふこむむとつろつ  
 こむむ 巾部と呼ぶ火番也とつろつ○小判金ハ大判とつろつ  
 こむむ 或ハ大板小板とつろつ○つろつ舟とつろつ火番の替用とつろつ  
 こむむ ○蝦夷とつろつつろつとつろつとつろつ  
 こむむ 倭名抄小碁局とつろつ  
 こむむ 御書とつろつとつろつとつろつ一字二字例也こむむ  
 肉丸が月日の間ハ関字とつろつ衣袋とつろつ日づけとつろつとつろつ  
 こむむ 狸小似とつろつとつろつ好んで人承とつろつとつろつ肉至て  
 こむむ 強さつろつとつろつとつろつをこむむ  
 こむむ 小早の義とつろつ足早乃小舟とつろつとつろつ也揚子方  
 言小舸謂之舩とつろつ  
 こむむ 奥列とつろつ唐書日中傳小獻琥珀大如斗とつろつとつろつ  
 つろつ出高麗倭國者色深紅有蜂蟻松枝者尤好とつろつとつろつ倭名



抄ノ俗音久波久とるるなり

こころがけ 強張の事こころとひても同

こころがけ 海人藻芥よ八月朔日の小を粥内裏仙洞を令

用給良薬也彼粥調法為と思焼くして粥入合とるるなり

こころあそび 盞囊抄よちりごち四五人合合とるなり

いひやう 疎縁とこころめて知音と選ぶをぬ

○こびと 使役の走卒といふ人ともなり○革小の犴皮とも

て小人爲りぬぬ下し○小人は歐羅巴の北海也高不二尺鬚

眉絶無男女無辨跨鹿而行鶴鳥常欲食之とるるなり

こびき 木挽の事也鋸匠をいふ

こびろ 荅葱といふ也○鄙俗ノ中飯とまてて合とるなり

書く極せり

こひか 鯉名とちり伊豆の地名也

こひざめ 恋の醒るるや六百を合とるるなり

こひぐさ 恋種の事ありかけともなり○一種の名より入也

のそ大をうて白む也涉世録より相思事也といふ

こひみづ 恋の事ありいれ也といふ

こひぬき 泥沼の事也きうけていふ

こひぐら 刀より琇とあり小樋口の事や鯉口也といふ

こひやう 弓の事あり事といふて小共の事といふと精兵と

いへて対て大兵ともいふぬ

こひあかむ 万葉集古今集より古事名伊留物也小恋死者

ちり至切の情也

こひごらも 恋衣の事旅衣といふ如し○一種の名よりいふ

ハ加賀白山より

こひのせさ 恋乃園也ん乃ほろといふ

こひぢがし 万葉集より恋よかと加うといふ

こひのはま 恋帖



つとくと袖乃そひちてまれ日のかゝる衣乃つまりきりて  
妻ノ端と兼り

こひまづひ

名醫類案小疔風とつら

△こぶー

拳とらり小節のやぬへ新撰字鏡小捧もこ

的矢小こぶーといつたり太平記ふるさう○木こ辛夷也

こぶー

呉服と古事記ふれりこぶー應神天皇の時

呉ふし使して衣服裁縫の工女と求めさせりるんり

人絹絶と通して呉服と稱も呉服や糸段鋪也○白石日本邦之

俗所稱呉服者蓋與深衣之制大同少異耳

こぶー

小匏のそ枇杷の和名也とつら

こぶくら

倭名抄甲倉とらり抄及新撰樂記アセクラ

らいつら

こぶんら

静海小美濃讃岐と法皇ふ献して御分國と稱せ

こぶら

静海玉海ふるさう

こぶら

倭名抄相據とらり西土ノ奉法り

こぶら

劫と歷るのそ也梵去一世とりて一劫といつら

こぶら

劫といつら也其名のそりり物とる也ほびよおと

用とる例多しわらひおびおふおとらり○ふとらりと通り

こぶら

大神文書鋪とらり甲の釘あり

△こぶら

金け行といふ覆るのそ也○禁裡院中の御築地の

塵穢と掃ふ者丹波国山岡より来りてこぶらといふ○

小治のちりそ悲田院の部類刑罰の時紙旗罪状姓名と

筆する者也

こぶら

小初といふ盛囊抄小禿倉とらり

こぶら

落窪おろ小腹とらりこぶらといふ腹中雷鳴のそ

也ほびよおとらりこぶらといふ雷のそといつら

こぶら

兒戲の中の小佛といふるらりそ白粉と焼乃



金小佛と稱する物ありて其沸騰する体と摸ち也といふ  
こりりりち 寒中ノ饒とこりりしる也本草小氷糕と云ふ  
是と六月朔日大隅大炊師ノ禁中ノ執事今民ノ用あり  
代氷の奈とありこれを氷に代て用る

こりりり 水精石といふ法おし出実ノ氷の如し西土ノ千年  
老氷所化といふ也或ハ紫色のありり按するに即水精とい  
今ノ水精と稱するものハ石英也といふ水晶ハ日本と云ふ  
法おしるるるるる水晶石英といふ五色あり留青日北も日本  
有青水粧紅水粧といふるるる○和州伊勢ちふる氷石ハ色紫  
白厚さ一二分あり板の如く氷の如く玉髓也

こりりびこ 氷川の邊諏訪の湖よりあり○隆信の言  
一井と掘假屋と建つる氷と一石穿ちそれより網を入るる  
穴穿ち竹竿より網を送るやうて幾石をかく穿ちて魚と捕  
とつる

こりりのそり 氷の橋也諏訪の湖よりあり○隆信の言  
月さゆらまおは勝のちらりりり氷のそりこりりこやぬそ  
如履薄氷の心よ就つる

こりりのせき 氷の園也おれりやぬそ  
こりりかみぞ 雪のこりりかみぞといふるハ伊勢也  
よひごんかみののちまこ田はあをまされぬるるる移ど  
蝦蟇の海といふも也

こりりれこび 氷の楔也狹小のこりりかみのてげら  
かりのこりりこびも後拾き集

こりりのみやつ 北山鈔小郡領とあり大おおや少いけ  
こりり○郡ハ仁徳天皇の法代始と云ふ類聚国史ノ事也

△こまけ 源氏よりてこのこまけと云ふ五津ノ充ノ細分  
○こりり○新撰字鏡小こまけといふあり



○こまつ 小松内府の子維盛紀州牟婁郡藤縄に匿る子孫主人とありぬ小松氏色川氏に其裔也といふ維盛の碑もあはるこまつ 信に困窮のまゝといふまるまむ也後とこむこまつに系通つる或宥とあり

こまつめ 田作といふ祝賀に用ふるまつめの洞と云也○おまつめつらつらといふのは黄氏乃俗名也

こまつせ 柱桓也といふるの奔驚と御しとのこまつせともいふ寄の系といふも○信濃佐久郡に駒寄といふ所の牧の地也

こまつめ 駒寄とて具足乃上帯とほせり下学集に喜撰式に若詠朝時とほひまれといふとも駒隙といふ駒の隙とさるふといふ也

こほどり 浮氏に左右よしほどりといふをたふりせよ細取の系といふ小取取ぬしこれ合は組といふ今も小兒

の戯もいふなり○奥州相馬家の領に妙見の初りて國中を作と毎年五月中に申と祭日といふ駒捉といふなり牧のそと追て初境といふ捉り也  
こほりと 狢人といふなり信に集るなり也  
こほぶえ 狢笛の系倭名沙小篇と列せり唐令に高麗笛といふ也  
こほり 木松の系也万葉集に云も又小松の系なり女の髪乃肉に入るとの也  
こほやう 濃といふなり細の系やうの助也  
こほひき 駒牽の系八月信濃甲斐武藏常陸上野等の小にあり松中一牧の馬と貢献するといふ是勅使の駒牽也  
こまつめき 倭名沙高麗錦といふなり  
こまつめへて 駒並ての系也かりても同  
こほざりり 新古帖にあり駒の系とさるなりたるといふ今も



トヤラウトウラウ○兒女の少賢一きとてこまぢやくとたつ  
といふもさうぢやるといふや

こまのこま 俗に瑣碎に忌避するといふ護摩の牛王乃  
といふぬア

こまづぢひ 小間使也禁中の微者也使番に隸屬也  
こまつぢり 小松摺也延喜式に云ふ也

こまのこま 護摩の灰也さうぢや根の徒に呼ぶのこまを  
ゆてんぢださうて銭貨とむさわりしやうといふぢやぬア  
ぢやとてさうくといふ

こまつぢり 延喜式に小町席と云ふも小區席と云ふも○禁  
中より町席と云ふも女官の名に町りといふも小町もいふ也小武部  
小左近小大進の例也云々の町三多れ町小野の小町といふ也玉造の小  
町四位少将をいふも小町といふ別人也徒然草に小野少将を極めて  
さうぢやとてぢやといふも玉造といふ文にさうぢやといふは使傳

行くちうといふ祝あまといふ野大師の侍伝の目録に入る程おの  
こらえさう

△こみ 俗に塵芥といふ水の滲るるうといふぬア

こみづ 倭名抄に白飲といふも濃漿の名也といふされ今も  
ありぬア

こみら 新撰字鏡に樽又桶といふも小甕の義也  
徑といふもゆたの義也

○こん 緝の音也論語の注に深青揚赤色といふもさうといふも  
語に深底鴉青色といふもさうといふもさうといふもさうといふも  
初らんにこんといふも獻字也西土に獻酬といふも○杯に酒と  
酌て客小進むといふも客飲畢て又酒と盛ると返すもさう  
酬といふ

こんよ 来世又来世乃義也  
こむろ 姓に小室といふも盛衰記に義仲の將に小室忠兼といふ



信列の少室ぬへ

こむぎ 小麦也○收穫の付陰刃をれを化して小蠶とあり述  
異記小麦為飛蛾とあり○麩小麦粉也○こむぎれはは  
倭名抄麩とあり今かこむぎをこむぎとあり○麩れ音と  
あり麩筋也

びんく 倭名抄小金鼓とあり又ひら  
びんく ○撰集小金鼓と金口とありされ金口者  
如來口業所記とあり

こんめん 曆家おつり五墓日也五行の墓乃也  
婚姻也尔雅壻之父為姻婦之父為婚婦之父母  
婚之父母相謂為婚姻とあり○同ち婦之黨為婚兄弟婚  
黨為姻兄弟とあり

こんせん 餛飩とあり四聲字苑餛飩餅割内麩煮煮之と  
ありとあり也官亦古本祭祀に用事とあり餛飩の多小象りと

れやや救荒野譜も今俗祀先者多用之とあり○臣下  
のこんとんとり六臣下と給也

こんらん 魂膽の字と填り俗語也  
混揜子とありりく番語也或ハ口規とあり天文  
家算術者もは器と用今絲欄といく鉄等も名と同  
る付蛮国の名もつるさハ二物とあり知とあり

こんとん 居家必用ふ年上金神剋授官木且とあり  
陰陽家おつりとありとあり白虎神のり也

こんがく 懇ろの音也  
こんめく 言妙の音也  
こんびん 言便の音也  
こんだて 音便の如  
とあり酒也韋居聽輿と食牌といふ也といふ朱子の語也  
日本紀小末年とあり



こびりさるゝ 濃紫の義也日中紀小黒紫とつんえ三位以上の  
 の袍の色也これひりさるゝとあり○後世小室の義も括用を  
 こんくさい 釣狐の狂言小つら 和歌連珠小吼噓の文字と填  
 たり狐の鳴き声とて稱する也和泉大寺郡小吼噓寺なり即物林寺  
 也今昔物語に狐ありてこびりと云と云えり今こんく  
 とつら

こんくさい 二水記小御所と云えり足利將軍公京  
 ましやせりびりて禁裡の休息ありて袋束ありてかされり  
 けりい名なり長檜局のびりひるりて  
 こんくさい 朱慶餘詩天然根性異と云也○米色小いふは  
 紺青也後朱雀帝の時撰津より始てありて技業略記にもは  
 紺青なり衣の色は金青なり○本草替疑小金青者空青之  
 最上也類聚雜要小金精とも云  
 こんだひま 小荷駄るの義也

こんくやく 蒟蒻の轉音なりし  
 こんけんわ 混本袂の名古ハスえも奈良朝中始まるなり  
 袂の体ハ古事記の片字ありとありて五七くと云なりと清輔  
 長の云る安部清行相傳の混本字  
 こんくやく 船島乃夕やけきとありてやと云はれ名をその名をかし  
 こもちりやと云ふこの初とありて調ひ字のまも面由とあり  
 こんくやく 切支丹の類族也  
 こんくやく 金輪際とあり大地の底とあり梵出あり也  
 こんくやく 金剛屑の義金剛鑽とあり天平五年より大坂沙  
 治玉石と葛下郡逢坂山の上よりあり物と云  
 こびりさるゝ 倭名抄に轉筋とあり腓の及る也漢書の跋  
 蓋も同  
 こんくやく 工答里亞とあり莫斯科米亞と並ひり  
 虫也とあり



△こめさこ 源氏和泉式部日記をくはつるをり後さるをみ  
「又兒めきさるる也」とり

こめく 本の名伊勢文川のよふありても細長く小也糶犬  
毒虫と避るくし近き世に外宮の貞命長官八十八の付  
一掛中よりゆりし鳩の杖は本ありととりあむてあひさく  
四月は赤紅の少部と用たり洪泡のかりこも用たり折るる本也空  
の室と結りては落ると呼べ又元日の後用るあり

こめらハ 職人<sup>コメラ</sup>をええり小女童<sup>コメラ</sup>はみ<sup>コメラ</sup>し今もめのつ  
らんとこめらととり

こめかき 倭名抄小蟀谷とあり 應嚼<sup>コメカキ</sup>而動と注せり米嚼  
の義也

こめのこま 後日本後紀十六國言有物如灰從天而雨畿  
内豊稔五穀價賤老農名此物米華とる也明和寅年卯年とも  
びるありし

○ここの 源氏<sup>コノ</sup>の物乃義也五葉とて木の花松かき  
うつろよととり西宮記に木物枝物とるるあり○全浙兵制  
に門ふと譯せり小者の義今もとり也○おのる<sup>コノ</sup>菟野<sup>コノ</sup>の氏  
は小物なり東鑑とる也

こりのり 本守の義庭木かきとちり役也ととり又木ちの如  
○吉野<sup>コノ</sup>の子守社<sup>コノ</sup>の式より吉野水分神社也ととり○子れ  
守ととり

こもや 財と借りの詞也子本とあり韓文柳氏墓誌にええ  
りの子息也今昔物作小利子ともちり作徳米と子粒とる  
も也○柳文<sup>カテ</sup>の權<sup>カテ</sup>其子母<sup>カテ</sup>贏<sup>カテ</sup>且不盡とる也子ハ利息母ハ本縮  
也贏も利也

こもぐ 交とありたぐい入ちがみさ也  
こもりぬ 萬葉集に隱沼とあり又こもれり小沼ともる  
こりりづ 日本紀に深集ふるえあり隱水の義也



こまがいの 茶碗の名は熊川とあり朝鮮の熊川郡也  
朝鮮語ふ然とくむとひ川とあり日本紀よるもあれや  
別なりあれも川の韓語也○平こまがいなり鬼ともいなり  
ことごとく

薦僧の名は薦席ふ堅ヤトより名とけとて  
とより風穴道者朗菴の餘流と汲りの也或は虚无僧の家  
也ともより朗菴宇治郡吸江菴に卒と風穴家ハ宇治郡岡本  
村のありなり初め妙安寺に住り妙安寺ハ妙法院の境内に  
あり昔の暮露の流あり○妙心寺開山遠忌の時薦僧堂ふ  
入て心經と吹法事とセー事あり

こりりづま 万葉集よるも隠姫とあり起立ハ母ありぬ  
知りハ又ありぬとぬハ玉の歌ハゆけゆけぬたたくもありとて  
あつぬこりりづまのりつるなり  
こもたぐも 薦席也平群よつげとありハ重繰の家也  
こもりや 隠石の家也底ふありとより

こもちまぢら 嫁娶乃衣服器物小大乃まぢらニとて  
のりしほもとむお條とて陰陽と合せとて也やつり或は  
天浮橋乃物ありともより

こりらひー 石中よお石と懐抱もとつり○富士山乃  
麓よ子持は村あり村よ一の大石ありて石に穴あり其穴と細行  
とよりて搔探よ必もまゝありと小石と知も木患はれ如  
幾とひよも同トてとるも木患と求る婦人分と潔  
め石と水に浸して其水と服する時ハ必も孕もとより佐石  
供よ馬湖南岸東西有二石東石腹中出二小石西石腹中懐二  
小石故棘人乞子于此有驗因号乞子石とえたり

こもまぢれ 薦簾の家夫木集よ  
わあろあろろろろの形のこもまぢれをやらとるも  
こもづらとて 薦ふり何家と薦と名とてこもまぢれ  
薦と編むやうなぐらとるなりやめく薦れぬつと



代喩(とり)

△こや 後夜とちり寅の刻也初夜ハ戌の刻也中夜ハ子刻也  
西天ハ晝夜とちり分つ不謂初中後也ト佛徒より知る相  
也まてちよやのちよる也

こやつ 古事紀ハ是奴とちり轉してこつとつり

△こゆみ 強とゆみとちり字彙又東鑑ハる也源氏物語ハ  
とれもえ西雀小鳥ともつりま本集ハ

林のゆみれとさきま世のゆみれハ其れ遊のまり小鳥ト  
○殿上小鳥合といふ中右紀ハる也堀河帝ハ時也

こゆき 徒然草ハゆきトこゆき丹波のこゆきといふ米  
つさふゆみゆみれゆきハ粉名といふた手れ粉名といふ  
とわやまりて丹波のこゆき也垣やまゆきとゆきト一し  
とわら相ちりゆきとる羽流とさかかりまてゆきのゆき  
ゆきゆきゆきト一後夜の助ハ自記ハるゆきトる也

こゆきのやみ 諺ハつり後撰集ハ

人の親乃ハやみとあつゆきも子代わりのゆきトまゆみゆき  
○こゆみ 蓼蓼といふ伊勢トてゆきといひゆきと痔ト用  
るあつゆきとえびつとゆき又野葡萄といふ漢名也又黒蒲萄  
ともいふ

こよひ 日本紀ハる也今宵とゆきト此也

こよろ 御用の字五雜俎トる也

こよりのあせ 倭名抄ハ寒とゆきト又小とゆきトる也煮こと  
らひのあせ

こよろぎのゆき 倭名抄ハ結とゆきト知てゆきトあつゆきト  
あつゆきトとゆきトゆきのゆきトあつゆきトる也小餘綾ハ磯  
といふ代ゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆき  
トゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆき  
及ろ也ト朝鮮ハる也ゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆき  
トゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆきトゆき



とつらての石也今の太破山破也

○ころろり 忍字はそへゆふ也徳堪の多下し咏後乃

俗字はころろりやころろり耐るも詠と

△ころろり 石塔の五輪ハ長阿舎経より二肘二膝頭項謂之五輪

者曰轉之義也亦云五体と云えころろり拮据し

ころろり 洛東ノ樵木町なり

ころろり 豊後の方言よりめとろり料理人の転訛也し播摩

又越後もろり人の妻とてころろりと呼も同

ころろり 祇園に御霊今もその所是八所の所是をくろり疫神

として陰陽寮の多々名延喜式初野群載をくろり云々なり正

曆五年祭疫神於船岡山上修御霊會と云へ是也長和四年も

建疫神祠於紙屋川西号花園今も修御霊今も云々祇園社

是也治曆二年も六衛府官人建花園社於双岡祭之俗稱御霊

舎とも云へ又御美今も舞臺清和実深も云へ明月記建久八年八月

廿一日今日称御霊有辻祭上辺雜人日來結構去十八日依御延引

今日可渡御棧敷施種々風物各神輿渡と云えなり○三代実深も

所謂御霊者崇道天皇伊豫親王藤原夫人及觀察使橘逸勢文

屋宮田麻呂等也と云へて神泉苑とて法會を行へ藤原基経常

行監護も慧達舟師と云へきハ所御霊の社ハ怨霊と和めたり此

祠也春秋小神有所飯乃不為禱のまゝ第一吉備聖霊旧説

吉備大臣とも云へ非也文武帝れ皇女二品吉備内親王也第八火雷

天神も菅家の霊とも云へ非也光仁帝の皇子也山城守治郡靈安

寺御靈明神の縁起も若宮と雷神と稱も光仁天皇の皇子也御母

ハ井上内親王と云へて早良親王等の御才也井上内親王と云へ治郡

押籠とてまのり時御懐妊とて彼地とて所誕生なりと後小神と現

一給も雷神也と云へなり其雷神の稱ハ凡そ怨霊の稱と云へ

り神と云へ拮据と云へ所謂崇道天皇早良親王高野御霊也伊豫

親王京極下御霊也吉備内親王京極上御霊也橘逸勢ハ下桂御







ころしき

ナグーと云ふ疑の字也自疑嶋のや

ころかし

胡盧抄のやぬし甲州信州とくハ豆枿と云ふ

乾枿指頭のやと云ふ

ころぜに

ころ強と云ふ寛永の令と云ふころひ強ぬし

ころたち

日本紀小専用威命の四字と云ふ自立のやぬ

し自檀と俗ふひと云ふだちと云ふまよや

ころふ

小櫓船のや小早舟ぬし夫木集太宰の任ふ

下りたふふあひれと云ふひと云ふまよや

ころび

ころふふあふ人りつと云ふひと云ふまよや

ころも

轉寐のやうたひと云ふ

ころも

四月より其衣と更て衣衣小と云ふ也其の衣が

ハ十月也俱小朔日小行ハ式也草庵集

ぬきと云ふ社のりんもつと云ふかじかれてと云ふと云ふ小深き

年中行事云合ハ十月更衣

たらぬて衣ものと云ふぬ衣と云ふ今ハと云ふ初ハと云ふ

枿のやと云ふ九月一日枿給と云ふ衣と云ふ綿と云ふ

也と云ふ○夢華錄ハ十月朔有司進煖炉炭民間皆置酒作煖

炉會と云ふ今爐関と云ふ

ころも

新撰字鏡ハ選と云ふ同ハ台記ハ衣管

と云ふ導生ハ賤ハ衣箱と云ふ

ころもの

倭名抄ハ被と云ふハ衣掖也と注セリ

ころも

漢語抄ハ衣幞と云ふ

ころも

倭名抄ハ襟と云ふハ衣領と云ふ也柳菰紙ハ

きひ乃と云ふと云ふハ新撰字鏡ハ被と云ふハ給と云ふ

くびぬと云ふと云ふ

ころも

衣の偏ハ所々のを衣衣のやと云ふ

と云ふ九夜也

ころも

衣の衣と云ふと云ふと云ふと云ふ



とひひ傳つる方は集は神とせしめてぬまはるるふゆはし  
のやほまてあつて同家あつてし又衣とかは悉のふかきむ  
乃より古帖より

梵經に衣裡宝珠とるるなり

△ごりごり 牛王とちり牛とごとく六牛頭牛黄牛蒨牛膝

も同じ古よりひき音りて呼まるとり牛王ハ如來の「稱を

るる」涅槃經智度論おるるなり○牛王寶印のりハ牛王

守護神咒經にも其修法ハ五大牛王儀軌ハ詳し上より佛の徳

稱ハ別也又巫祝附寄して生土の文字と本居の社の字やを

とつてハ拙とつて○熊野の牛王寶印ハ鳥點と用ふる鳥を

熊野の神使とらるるその裡に記請文の事ハ保平盛衰記

よるるなり○金剛宝戒章ハ熊野三山のりと述べて此三神殃

妄語之罪ハ破禁之穢とるるなり起るとる事なりハ後氏

よりと始りりん元暦二年武藏坊弁慶の借米の記文も掛

熊野白山約束之状如件とるるなり後世何豆彩相お不權

現とる鎌倉時代より此事と平泰時の奉行頭人ちと

るるに政事ハ私せりとの連判の記記文とちり時言かるとりて

始りりん○事林廣記ハ西天南丘華羅國事西天佛教尊牛屋壁

皆塗牛糞以此為潔各家置壇以牛糞塗壇然後置花水藝香供

佛とるん耶舍法師傳ハ西國土俗以牛能耕地生出萬物故以牛

糞為淨梵王帝釈及牛並立神廟以祠之佛隨俗情故同為淨と

るるなり明史ハ瑣里國人崇釈教重牛日取牛糞燒灰塗其体

又調以水徧塗地上とる席上齋談も北方有牛王廟とるる

なり感神院と牛頭天王と稱し攝社ハ牛王地社ありもよ也

皆浮屠氏より起つる所なりハ楞嚴經ハ牛糞取雪山

大カ白井若非雪山其牛真穢不堪塗地とつて

ことわり 俗に其の多也

ことわり 采畑お終るるるなり色遣の多也



こまづくりひ

警咳のお也聲造りけりひ及也

△こまづくりひ 新撰字後小款とて嗽とてこまづくりひあり

△こまづくりひ 五位踏の多いびのりふしし○山家五位り形

五位少似てかま又たふも星五位ハまた也旋目也背黒五位

位下と後日本後紀より也

△こまづくりひ 今も祭日のゆりて後宴とていふ也

△こまづくりひ 又書の高宗昭日の休小祭の明日祭る也とて

△こまづくりひ 又文也考杜能かんとあり

△こまづくりひ 又文也考杜能かんとあり

△こまづくりひ 倭名抄小温菘と訓ヤウ菜菔と同

倭訓梨中編卷之八終



